

審査員特別賞

『ほった。』を読んで私にできること

小平市立花小金井南中学校 3年

甲斐 嗣弓

朝。犬を連れ、小金井公園を歩く。ひまわりが咲き乱れコゲラが飛んでいる。そんな自然を散歩するのが日課だ。

ある朝ふと下を見ると、犬が何かの臭いを嗅いでいる。とっさにリードを引き見てみると、煙草の吸い殻だった。私は大好きな自然が汚され不快になった。犬目線で歩いてみると普段見えない世界が見える。吸い殻、空き缶……。見つけるたびに腹が立った。

これをきっかけに世界の環境問題に興味を持ち、ある本に出会った。『ほった。』という、坂本達さんがアフリカに井戸を掘った話だ。彼は自転車で世界一周中、死と隣り合わせで暮らすギニアの人々を目の当たりにするが、彼自身もマラリアに感染してしまう。薬も十分に無いなか、現地の医師や近所の人々の優しさに助けられ恩返しを誓った。彼は約4年後もう一度ギニアに渡り、井戸を完成させる。

私はこの本を読んで「当たり前」が崩された。蛇口をひねればきれいな飲み水が出ること。病気をしたら病院へ行けば薬があること。たまたまこの国に生まれて、良かったというより申し訳ない、心苦しいという思いでいっぱいになった。だからこそ決してきれいとは言えない環境に生きる人々を想い、なにかアクションを起こさなければならないと感じた。

もう一つ感じたことは、出会った人の優しさだ。彼が極限状態に陥った時、助けてくれたのが現地の人だ。「豊かさ」とはモノが充実して不自由のないことではない。自分の食事も確保出来ないなか「助けるのが当たり前」と食料を分けてくれる人。「どんな環境でも言い訳さえしなければ夢をもてる」とサッカー選手を夢見て手作りのボールで遊ぶ男の子。そこには「心の豊かさ」がある。私もこの人々の力になりたい。貧しくも助け合いながら力強く生きるギニアの人々に心を打たれた。

中学生の私に出来ることは何だろう。過酷な環境を生きる人々を調べた時、ユニセフのホームページにたどり着いた。ギニアもあるサハラ砂漠以南のアフリカでは今の状況が続くと2030年までに病気で5歳になれず亡くなる子6900万人の半分以上がこの地域にいる。数だけで比べてしまうと、太平洋戦争で亡くなった日本兵は230万人。この状況を伝えなくてはならない、と感じ生徒会活動でユニセフ募金を行うことを決めた。募金時に具体的

に困っている子の状況を訴え、全体で 50 万円程集めることができた。

坂本達さんのように井戸を掘りに行くことはまだ出来なくても、外国を身近な場所だと考え、世界の環境問題や社会問題に目を、心を向けていくべきだろう。

私の最近の日課が一つ増えた。それは犬の散歩をしながら小金井公園のゴミを拾うことだ。アフリカの人々の優しさや温もり、そして未来の地球を守るために、私ができることは今ここにある環境を守ること。一人一人の小さな心掛けが集まり、国際協調に結び付くことを願う。